

## 第6室(書跡)

# 「日本の古経典」展示解説

### N-10 称讃浄土仏撰受経 (しょうさんじょうどぶつしょうじゅきょう)

この経典は唐・玄奘(げんじょう)の訳になり、極楽浄土(ごくらくじょうど)の仏菩薩ならびに国土の勝妙をたたえ、諸仏をほめたたえたことを説いたもので、鳩摩羅什(くまらじゅう)訳の『仏説阿弥陀経』の異訳本です。黄麻紙九枚を継ぎ合わせ、楷書体(かいしょたい)で書写していて、いかにも天平写経の雄渾な書風をみせます。

### N-14 仏名経 (ぶつみょうきょう)

『仏名経』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号を受け入れて覚えておくことを説いた経典です。この仏名経は過去、現在、未来の3巻に構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書により、永治元年(1141)に五師隆慶(ごしりゅうけい)が先師・林幸大師(りんこうたいし)の一周忌を供養し、同時に仏名会(ぶつみょうえ)を催して、この経を施入したことがわかります。

## 第6室 染織—修理の完了した染織品—

染織はこれまでガラス板にサンドイッチするかたちで保管されてきた染織品の修理が完了したことを受け、作品の初公開をします。製作から1300年以上が経過し、劣化の激しい染織品を安全な状態で未来に伝えることは、博物館の大切な使命です。

### N-319-177-1 鳳凰文刺繍残欠 (ほうおうもんししゅうざんけつ)

鳳凰などの姿を鎖繡による両面刺繍で表わした残欠です。両翼・蓮華座上の脚・葡萄の葉とみられる植物文がのこっています。鎖繡は我が国の古代ではきわめて稀な技法で、中国・初唐期の製作である可能性が考えられます。正倉院伝来品との比較により、本来は正倉院に伝来した作品と考えられます。

### N-319-177-2 天蓋垂飾残欠 (てんがいすいしょくざんけつ)

天蓋の飾りの残欠で、表面側の紫地綾、裏面側の臈纈平絹、縁をめぐった錦の残欠がそれぞれ少量ずつ残されています。

### N-319-177-3 夾纈裂 (きょうけちぎれ)

夾纈という板締め染の技法により、輪つなぎ風の花文を表わした平絹の残欠と花鳥文の残欠。文様や製作技法から、本作も正倉院に伝来した染織品と考えられます。

### N-319-177-4 臈纈裂 (ろうけちぎれ)

いずれも全体像が不明ながらも、臈纈というろうけつ染めの技法により模様を表わした残欠。

### N-319-177-5 纈纈裂 (こうけちぎれ)

黄緑地に目結文を表わした纈纈の平絹残欠。本来の形状は判然としないものの、法隆寺献納宝物においては同種の裂を褥の裏裂として多く用いています。

### N-319-177-6 平絹・緞幡残欠 (へいけん・しじらばんざんけつ)

平絹や緞によって作られた幡の残欠です。向かって右の残欠は幡足の一部を残しています。

### N-319-177-8 赤地平絹・緑地平絹縫合せ (あかじへいけん・みどりじへいけんぬいあわせ)

赤地平絹と緑地平絹を縫い合わせた残欠で、本来は幡の一部であったと考えられます。

### N-319-177-9 緑地平絹縫い合せ (みどりじへいけんぬいあわせ)

緑地平絹を縫い合わせた残欠。本来の形状・用途は不明です。

\*裏面につづく

**N-319-177-10 黄・茶地平絹幡手残欠 (き・ちゃじへんけんばんしゅざんけつ)**

平絹幡に取り付けられていた幡手(幡頭手または幡身手)の残欠。裂を2つ折りにして帯状としたうえで、先端の角を内側に折り込んで剣先形としています。

**N-319-177-11 黄地平絹幡足残欠 (きじへいけんばんそくざんけつ)**

**N-319-177-12 濃緑地平絹幡足残欠 (こいみどりじへいけんばんそくざんけつ)**

**N-319-177-13 緑地平絹幡足残欠 (みどりじへいけんばんそくざんけつ)**

いずれも平絹による幡足の残欠です。幡足は幡の下に垂れ下がる長い吹き流しのことです。幡身に多色が用いられる場合は、幡足も各色に染められました。

**N-319-177-14 茶紫地平絹 (ちゃむらさきじへいけん)**

**N-319-177-15 赤紫地平絹 (あかむらさきじへいけん)**

**N-319-177-16 赤地平絹 (あかじへいけん)**

**N-319-177-17 青・青緑地平絹 (あお・あおみどりじへいけん)**

**N-319-177-20 濃黄緑地平絹 (こいきみどりじへいけん)**

**N-319-177-21 黄緑地平絹 (きみどりじへいけん)**

**N-319-177-22 黄地平絹 (経錦付) (みどりじへいけん たてにしきつき)**

**N-319-177-28 淡茶地平絹 (うすちゃじへいけん)**

**N-319-177-29 黄地平絹 (きじへいけん)**

**N-319-177-30 黄地平絹 (きじへいけん)**

いずれも用途不明の平絹残欠です。製作されてから1300年以上が経過し、バラバラの断片とはなっていますが、美しい色彩がよく保存されています。これほど劣化した状況でなおよく色を留めていることから、飛鳥・奈良時代における染色技術の優秀さが偲べれます。